

初期の博言学科卒業生

明治・大正の言語学 その3

佐藤喜之

1. はじめに

チェンバレン Basil Hall Chamberlain 辞職後、東京帝国大学博言学科の担任はフローレンツ Karl Adolf Florenz を挟んで上田万年が引き継ぎ、高楠順次郎が一時担当したものの、再び上田が担当、後継者の育成に力を注いだ。明治38年(1905)7月、上田が国語国文学第一講座担任となった後は、弟子の藤岡勝二が跡を襲い東京帝国大学文科大学言語学講座の主任となった。上田の言語学講座担任期間は合わせて9年余りであった。

一方、東京帝国大学に対して、明治30年(1897)6月に京都帝国大学が創設され、明治39年(1906)には文科大学(文学部に相当)が開設された。京都帝大にも言語学科を設けることになり、その担当者として、上田の弟子で、当時は東京帝大の助教授として国語学を講じていた新村出に白羽の矢が当たった。新村は独英に留学の後、明治42年(1909)5月、京都帝国大学文科大学言語学講座担任となった。

このあと明治末から、大正を経て昭和の初めまで、東の藤岡勝二と西の新村出が長く日本の言語学界をリードしていくことになる。

東京帝国大学博言学科の名称は明治33年(1900)に言語学科に改称されるが、博言学科時代の卒業生で、藤岡、新村の先輩に当たるのが榊亮三郎、小川尚義、金沢庄三郎である。この3人は上田万年が独仏留学から帰朝後直ちに博言学科担任になったとき、既に3年生、2年生として在籍していた¹。

2. 榊亮三郎(1872-1946)

榊亮三郎は和歌山の出身、真言宗の宗旨を奉じる家庭に育った。大阪にあった大学予科第三高等中学校(後の京都の第三高等学校)を経て、明治25年(1892)9月に東京帝国大学博言学科に入学した。当時の博言学講座はフローレンツが担当しており、その専門の梵語(サンスクリット)を榊に教授した。榊は幼少の頃から、実家近くの高野山などで目にする悉曇文字、いわゆる梵字に対して、大きな興味と好奇心を持っていた。梵語以外にも、博言学科生として当然のことながら、英独仏の近代語やラテン、ギリシアの古典語を習得し、明治28年(1895)に卒業後は大学院に進学し、梵語学を専攻したが、病のために一時研究を中断せざるをえなかった。後に弟子たちに述懐したところでは、腸チフスに罹患したとのことで、榊自身によれば原因は生牡蠣を食したことにあり、生涯、牡蠣を口にすることはなかった。

¹ 拙稿(2004)「博言学事始め」学苑762号の年表を参照。

明治30年(1897)に京都西本願寺に招聘されて、同寺の文学寮で英語、ドイツ語、インド文学を講義した。その後、第三高等学校教授に任命されて、ドイツ語、英語を担当。京都帝国大学に梵語学梵文学講座が開設されるにあたり、榊がその主任に擬せられ、明治39年(1906)には梵語学研究のため満3年、主としてフランスに留学し、シャヴァンヌ、ペリオ、レヴィ、メイエといった綺羅星の如き東洋学者、言語学者との交流を深めた。帰朝後の明治43年(1910)4月、京都帝国大学文科大学教授として梵語学梵文学講座担任を命じられ、昭和7年(1932)4月の停年退官まで、研究に邁進し、学生の指導に当たった。

榊の大学における講義は、インド文学史、一般梵語学演習の外に、印欧語比較文法、チベット語、パリ語など広汎なものだった。榊の関心はインドにとどまらず、さらに西の方にも及んでいた。昭和6年(1931)の京都帝国大学夏季講習会では、「古代波斯と印度、中世波斯と支那・日本」という題目で6日間の講義を行った。榊の京都帝大における後継者である足利惇氏はイラン学の専門家として知られている。

榊の論著はそれほど多いものではないが、代表的なものに、9世紀にチベットで作られた梵語とチベット語対照の仏教語彙集である(1916)『梵蔵漢和四訳対校 翻訳名義大集』がある。これはフランスに留学していたとき、パリ国立図書館蔵の写本を榊自身が筆写し、帰朝後に和訳を附して出版したもの²。

現在でもまだ入手できる榊の著書では、明治40年(1907)に出版された『解説梵語学』がある。もちろん当時のままではなく、昭和48年(1973)に手を加えられ『新修梵語学』永田文昌堂、となっているが、平成15年(2003)で第十二刷となっており、『翻訳名義大集』とともに、いまだに需要が衰えないようだ。

一般向けの著書では没後に、(1947)『弘法大師と其の時代』創元社、が出版されている。同書は大正2年(1913)と昭和16年(1941)に行った講演の旧稿を公刊したもので、その中で弘法大師の梵語の学力を称揚したり、或いは梵語、ペルシア語などを駆使して語学的考証をしたりするなど、博言学科卒業生の面目躍如たるものがある。榊の主な論攷は(1980)『榊亮三郎論集』国書刊行会、に収められている。

「榊教授は雷親父と仇名される癩癩持ちで、見るからに魁偉な容貌の持主」〈羽田明(1988)「足利先生の面影」『足利惇氏著作集』第3巻、東海大学出版会 p.241〉で、京都帝大の同僚で東洋史学者である桑原隲蔵の長男・フランス文学者の桑原武夫は「ツイタテと仇名したそのイカツク四角い顔は幼時から知っていた」〈桑原武夫(1954)「忘れえぬ学者—榊亮三郎先生の思い出—」文藝春秋4月号、p.94〉³。

一番身近にいた長男の思い出として、

「父はご承知のとおり、世の中の平均から言えば奇人変人の部に属する。和歌山県人特有のネアカ

² 1941年、西尾京雄編でチベット語索引が刊行され、本体と合わせて1962年に鈴木学術財団から、1981年に国書刊行会から、1998年には臨川書店より複製出版された。

³ 『榊亮三郎論集』の巻頭に榊の写真が掲載されている。

でありながら、癩癩持ちのお天気屋、虫のいどころが悪いと何を言い出すかわからない。触らぬ神にたたりなしと敬遠されたのは無理からぬことと私も思う」〈榊米一郎 (1988) 「惇氏さんの思い出」『足利惇氏著作集』第3巻, p.204〉。

榊退官後に京都帝大梵語学梵文学講座を率いた弟子の足利惇氏の回想、

「私は本学に参り、榊先生に梵語を教わることとなったわけでありませう。榊先生は本学に御就任まで、三高でドイツ語の教授をなさっていたのでありますが、只今ここにお見えの田中秀央先生とか、最近お亡くなりになりました医学部の松尾巖先生、さらには戦前の総長、故浜田青陵先生といった往年の教授がたから、いずれも三高生時代に榊先生に苦しめられた昔話を承わったものであります。榊先生は左様にきわめて厳格な方でありました。しかし先生の厳格は、かならず相手に対する温情より発し、相手の為を思って忠告を、また叱責を与えられたのであります。私自身、先生にたえず叩かれました。(中略) 榊先生に関するエピソードは無数にあり、奇人と申しては失礼であります。とにかく現在ではもう見られぬ型の教授、よい意味の奇人でありました」〈足利惇氏 (1988) 「感想」『足利惇氏著作集』第3巻, p.29, 初出 (1964)〉。

とにかくいろいろなエピソードのある人で、家が背中合わせに住んでいた桑原武夫の回想によれば、桑原は、榊からたびたび口頭試問を受けたそうで、ラテン語の語尾変化を言わされたり、桑原がフランス文学で学んでいる教科書を読ませて解釈をさせられたり、というようなことがあったという。榊の口頭試問の悪癖は桑原相手だけではなく、京都帝大の同僚に対しても容赦なく行われ、東洋史学の内藤湖南もその被害を受けた一人ということだ。

3. 小川 尚 義 (1869-1947)

小川尚義は愛媛県松山の出身。明治26年 (1893) に第一高等中学校を卒業後、博言学科に入学、明治29年 (1896) 7月に卒業した。卒業後直ちに台湾総督府の官吏として赴任している。台湾行きについては、当時台湾総督府の学務部長として、台湾での日本語教育従事者を探し求めていた伊沢修二を上田万年に紹介され、学務部編修事務嘱託として赴任することとなった。小川自身も台湾の諸言語に関心を持っていたようだ。当時の台湾は日清戦争直後の騒然とした時期であり、明治29年 (1896) 正月には日本人教員6名が殺害される事件が起こっている。

小川は、総督府の編修官、国語学校教授、視学官などの役職を歴任している。官吏時代の一番大きな仕事は、台湾語の辞書を編纂することであった。

台湾には、もともとオーストロネシア語族 (代表的な言語はインドネシア語、タガログ語) に属する言語である高砂族諸語を話す原住民が住んでいたが、後に中国大陆から中国語の方言のひとつである閩南語を話す人びとが移り住み、勢力を伸張していた。小川は閩南語に属する台湾語の辞書を (1904) 『日台大辞典』として、さらに (1931-32) 『台日大辞典』2巻⁴を編修、出版した。両書とも、台湾

⁴ この2巻本の辞書は (1983) 『台湾語大辞典』国書刊行会、として復刊された。2004年には、片仮名表記をローマ字表記に改め、単語を増補した『新編台日大辞典』が王順隆により私家版として出版された。

総督府編となっているが、後藤新平台湾総督府民政長官の序文や凡例に小川が主となって編纂されたことが述べられている。

両辞書とも台湾語は片仮名で表し、日本語では区別しないが、台湾語では区別する語尾の n と ng を「ヌ」と「ン」で表記したり、或いは中国語に特有の声調を示す線を片仮名の横に付け加えたりといった工夫をし、片仮名表記ではあるが台湾語の音声をうまく表記している。『日台大辞典』では、辞書本文の前に「日台大辞典緒言」として、212ページに渡り、閩南語（同書では南部福建語と称している）について北京語や上海語などと比較しながら、音声を中心として詳しく記述されている。

台北帝国大学の創立に伴い、昭和5年（1930）3月、小川は台北帝国大学文政学部言語学教室教授となったが、このとき既に61歳であった。官吏時代の小川は閩南語の研究が中心であったが、台北帝大教授となったあとは、高砂族諸語の調査、研究に重点が移った。

昭和5年（1930）から8年にかけて、『パイワン語集』『アタヤル語集』『アミ語集』と続けて出版した。これらも台湾語の辞典と同様に台湾総督府編となっているが、小川の著書である。

昭和5年（1930）、上山満之進台湾総督は退職するにあたり、高砂族研究のために多額の資金を台北帝大に寄贈した。それを土俗人種学教室と言語学教室とで配分し、この資金を使って小川は高砂族諸語の実地調査、研究を行った。この研究には1918年言語学科卒の浅井恵倫大阪外国語学校教授が協力し、二人で手分けして台湾中を歩き回り調査した。その成果が（1935）『原語による台湾高砂族伝説集』刀江書院⁵、である。同書はA4判850ページを超える大冊で、12の高砂族諸語による伝説が、最初に各言語の語法概説を記述したあと、2段組で左に原語を音声字母により表記し逐語訳を加え、右に日本語訳、脚注で単語・語法について注釈し、巻末に単語表を附している。これにより昭和11年（1936）に、小川は帝国学士院恩賜賞を受賞するが、この本もまた小川、浅井の名前を表に出さず、台北帝国大学言語学研究室調査としている。

小川は昭和11年（1936）に退官、郷里の松山に戻った。小川の後任には浅井恵倫（1895-1969）が就いた。小川の残したノートなどの文書類は、浅井恵倫が受け継ぎ、現在では東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に浅井文庫として収蔵されている。

4. 金沢庄三郎（1872-1967）

金沢庄三郎は大阪市内の出身。第三高等中学校を経て東京帝大の博言学科に学び、明治29年（1896）卒業し、大学院へ進んだ。在学中からアジアの言語研究に志し、大学2年の時には外山正一文部大臣に認められて北海道に派遣され、2年間で4回北海道を訪れ、合わせて150余日滞在して実地にアイヌ語の調査、研究を行った。明治31年（1898）6月には文部省第一回東洋留学生として韓国へ派遣され、3カ年滞在、朝鮮語研究に邁進した。現在では金沢庄三郎の名前を知る人も少ないが、30年くらい前までは、金沢は『広辞林』⁶の編者として知られていた。

金沢は日本のアイヌ語研究の草分けとあってよい。アイヌ語研究は江戸時代に実際上の必要性から

⁵ この本に対する需要も根強く、1967年に刀江書院が再版、1996年にも台湾の南天書局から復刊された。

⁶ 1907年刊の『辞林』、改訂した1925年刊の『広辞林』に始まり、現在でも改訂版が出されている息の長い辞書。特に『広辞苑』の前身の『辞苑』が1935年に出版されるまで、一冊本の国語辞典として一世を風靡した辞書だが、「国語辞典誕生のいきさつ」を書いたと称する倉島長正（2003）『日本語100年の鼓動』小学館、では『広辞苑』は取りあげているものの、『広辞林』はほぼ無視している。

始まり、『藻汐草』『蝦夷語箋』という幕末に出版された2冊の刊本を始めとして、写本を含めていくつかの語彙集、会話集が残されている。しかし本格的な研究はもちろん明治に入ってからのもので、まずは宣教師バッチェラー John Batchelor (1854-1944) が明治20年 (1887) に *A Grammar of the Ainu Language* を、明治22年 (1889) に『蝦和英三対辞書』を相次いで出版し、その後の研究の基礎が築かれた。金沢の大学時代はバッチェラーの著書を利用できたし、さらには神保小虎 (1867-1924) というアイヌ語の先達もいた。

神保小虎⁷は東京に生まれ、東京大学予備門を経て東京大学で地質学を専攻し、明治20年 (1887) 卒業、翌年北海道庁の技師となり、道内の地質調査に従事し、並行して、アイヌ語地名の調査、研究を行った。神保もバッチェラーの著書を利用できたうえ、実地でアイヌ語を学ぶことができた。神保は語学の才能に特に秀でていたようだ。その後、ドイツへ留学、専門を鉱物学に変更し、明治27年 (1894)、帝国大学理科大学の鉱物学助教授に就任、明治29年 (1896) 教授となった。

神保は「ばちえら氏創成アイヌ語学ノ一斑」と題する文章を3回に渡り「東洋学芸雑誌」に掲載している。これは理科大学助教授理学博士神保小虎講演、文科大学博言学科第三年生金沢庄三郎筆記によるもので、巻頭に

「余嘗テ文科大学ニ於テ博言学学生ニ「アイヌ」ヲ教ヘタリシガ今爰ニ其講義ノ一部ヲ取り博言学科学生金沢庄三郎氏ニ托シテ日本語ニツヅリタリ」(1896)「東洋学芸雑誌」13-176, (2001)『アイヌ語考①』ゆまに書房, に再録, p.26)

と書かれているように、金沢は神保の授業に出てアイヌ語を勉強した。神保の論文は、バッチェラーのアイヌ語文法の大意を日本語で記したもので、後に金田一京助や知里真志保らによりバッチェラーは批判されるが、このころは他に学ぶための手だてはなかった。

金沢のアイヌ語研究の成果は (1898)『アイヌ語会話字典』金港堂書籍⁸, となって結実した。この書は神保小虎との共著の形にはなっているが、神保の序文によると、実際は金沢がひとりで纏め上げたものだ。

アイヌ語というと一般的には金田一京助が有名であるが、金田一は金沢のアイヌ語の授業を受講した。金沢は明治35年 (1902) から東京帝大の講師として言語学科で朝鮮語を教え、明治37年 (1904) からは朝鮮語とアイヌ語を担当している。金田一は明治37年 (1904) に言語学科に入学した。

「私の学生時代は、金沢先生にアイヌ語の手ほどきをして頂いた。たまたま二学年目に、ジョン・バッチラーの『アイヌ・英・和辞典、附アイヌ語文典』が出版されて、その一冊を神保先生から入手した。これはバッチラーの第二版で、第一版の『蝦英和三対辞書』(北海道庁版)とは、見ちがえるほど詳しいものとなっていた。／＼が、その文法は、余りにも簡単で、殆んど役に立たないし、動詞の活用も幾種あるのか、ないのか、テンスというものも、果して、過去、現在、未来の表示だか疑わしいし(後略)」(1993)「アイヌ学究の思い出」『金田一京助全集』第15巻、三省堂, pp.210-211, 初出 (1954)

⁷ 1908年言語学科卒業の神保格は令弟。

⁸ 1973年に北海道出版企画センターから復刊された。

具体的な金沢の授業内容は述べられていないが、金沢自身の調査資料や『会話字典』を用いたことであろう。金田一は自分の恩師である上田万年、新村出や、卒業後にいろいろな関わりを持つ柳田國男については、感情を込めた随筆を残しているが、金沢に関しての纏まった文章はなく、「アイヌ語の恩師の金沢庄三郎博士」〈(1964)「私の仕事」『金田一京助随筆選集 3 おりおりの記』三省堂, p.27〉のように事実を淡々と述べるにとどまっている。金田一は卒業前に金沢の『辞林』の手伝いをし、卒業後に勤めていた中学教師の職を失ったとき、金沢の世話で三省堂に就職している。

一方、金沢も

「アイヌ語に関しては僅かにチャンバレン氏のアイヌ語地名・神話等の研究（東京文科大学紀要，明治二十年刊）とバチェラー氏の蝦和英三対辞書（明治二十二年北海道庁版）とを出せるのみ。而かもこれ両つながら外人の著作たるにあらずや。噫，アイヌ語の研究は遂に長へに我が邦人の手より逸せんとするか」〈(1920)『言語に映じたる原人の思想』大鑑閣，(1941)創元社，復刊，p.134〉。

この文章は大正8年（1919）に書かれたものだが、金田一は大正2年（1913）から東京帝国大学文科大学講師としてアイヌ語を講じ、同年に『あいぬ物語 附樺太アイヌ語大要・樺太アイヌ語彙』、大正3年（1914）には『北蝦夷古語遺篇』を続けて出版している。先輩であり恩師でもある金沢は、当然のことながら金田一の研究のことを知っているはずなのだが。

金沢庄三郎は、『アイヌ語会話字典』を出版してからは、アイヌ語研究を進めることはなく、前述したように韓国に留学し、朝鮮語を専門とすることになる。韓国から帰朝後、明治33年（1900）、東京外国語学校韓語学科の教授に就任した（前任者は岡倉由三郎）。明治35年（1902）には「日韓語比較論及動詞論」により文学博士の学位を授与された。金沢を有名にしたのは、この日本語と朝鮮語との比較で、明治43年（1910）に『日韓両国語同系論』三省堂⁹、として英訳付きで刊行された¹⁰。日本語と朝鮮語との関係を、音韻・語彙・文法の各方面で比較し、それまでの先人の研究を集大成したものといえる。その巻頭で次のように同系論の立場を明確に述べている。

「韓国の言語は、わが大日本帝国の言語と同一系統に属するものにして、わが国語の一分派たるに過ぎざること、あたかも琉球方言のわが国語におけると同様の関係にあるものとす」

金沢は日本語と朝鮮語との間の音韻対応の法則を示しているが、これに対しては、

「かなり暗示に富む書物であって、当時はこれによって両言語間の親族関係が証明されたと考えた人もあるが、今日から見れば、その証明は成功していないと思われる。（中略）然るに音韻法則は断片的に問題となっているに過ぎない。単語或いは morphèmes の一致を証明するに当り首尾一貫して、音韻法則を基準とすることがない。この根本的欠陥が博士の論証を「証明」としては無効としているのである」〈服部四郎（1948）「日本語と琉球語・朝鮮語・アルタイ語との親族関係」民族

⁹ (1973)『論集日本文化の起源』第5巻日本人種論・言語学，平凡社，(1980)『日本語の系統』現代のエスプリ別冊，至文堂，に再録，ただし英訳は省かれている。引用は(1980)『日本語の系統』による。

¹⁰ この本は最初，1909年に「東洋協会調査部学術報告第1冊」に収められ，翌年に単行本化された。

学研究13-2, (1959)『日本語の系統』岩波書店, に再録, p.36)。

当時は日本語と朝鮮語との比較研究が盛んで, その嚆矢をなすのが, 日本に長く滞在した英国の外交官アストン William George Aston (1844-1921) の以下の著述である。

(1879) 'A Comparative Study of the Japanese and Korean Languages' *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Series, vol.11*¹¹

この論文は日本語と朝鮮語を phonetic system, the functions of their grammar, the character of their grammatical procedures の三つの観点から比較し, 両言語間の音韻対応を導き出している。音形の似た単語を比較するだけでなく, 科学的に結論を導き出そうという姿勢が見える。論文が発表されたのは博言学科ができる前で, 日本語朝鮮語の比較に関しては, アストンを超えるものは長いあいだ出なかった。アストンは結論として次のように述べている。

There can be no doubt that a genuine relationship exists between Japanese and Korean, but it is by no means easy to estimate its degree. The principles applicable in the case of Aryan languages are of little use to us here. According to our experience of them, two languages with no common numerals could hardly be classed together at all, while on the other hand, the agreement of Japanese and Korean in the elaborate rules for the position of words in a sentence suggests a very close affinity indeed. <p.363>

アストン論文以降で注目すべき研究としては,

白鳥庫吉 (1898)「日本の古語と朝鮮語との比較」*國學院雑誌* 4 - 4 ~12¹²

宮崎道三郎 (1906-07)「日韓両国語の比較研究」*史学雑誌*17- 7 ~10, 12, 18- 4, 8, 10, 11¹³

の二つが挙げられる。

東洋史学者, 白鳥庫吉 (1865-1942) の論文は長大なもので, 最初に日本語と朝鮮語の類似点5つを挙げている。

1. 朝鮮語は国語の如く主格・目的格・動詞と順序す。
1. 朝鮮語にては国語の如く尊敬動詞あり。
1. 朝鮮語には国語にての如く天爾遠波なるものあり。
1. 朝鮮語にては国語にての如く良行をもて始まる言なし。
1. 朝鮮語にては日本の古に於けるが如く, 濁音を示す音符なし。

¹¹ 大野晋による抄訳が『論集日本文化の起源』第5巻に収録されている。原文は (1997) *Collected Works of William George Aston, vol. 1*, Ganesha Publishing に影印再録。

¹² (1970)『白鳥庫吉全集』第2巻, 岩波書店, に再録。

¹³ 中田薫編 (1929)『宮崎先生法制史論集』岩波書店, に再録。

とし、続けて「此の外格別なる処に於ても、日本語に類似する所あれども、文法形式上の類似を指摘するは本稿の趣旨にあらざれば、此度は省略に従へり」〈『白鳥庫吉全集』第2巻, pp.150-151〉と述べて、語の比較に限定する旨を述べている。音韻、文法などを体系的に考察したアストンと比較すれば、方法論としては後退している。

白鳥論文では日本語の186語について、『古事記』『万葉集』を中心とする古典から用例をとり、朝鮮語と比較し、論文の最後に両言語の音韻対応を提示している。白鳥は日本の東洋史学の開拓者であるが、東洋諸言語の研究の重要性を早くから唱道し、自らも研究にあたり、前掲論文以外にも朝鮮語に関する論文や「『高麗史』に見えたる蒙古語の解釈」、長大な「朝鮮語と Ural-Altai 語との比較研究」といった論文がある。

白鳥は当初、日本語と朝鮮語が同系であることを念頭に置いて論を進めていたが、後に「余輩も、嘗て此両国語の間には、必ず緊切の関係あるべしと信ぜしが故に、多年二語の比較研究に従事し、以つて一般の期待を満足せしむる程の結果を収めんと務めたりき。然るに、事實は予想と相反し、研究の歩武を進むるに従つて、益々両語の関係疎濶にして、当初に期待したるが如き親密のものにあらざるを感ずるに至れり」〈(1950)「日・韓・アイヌ三国語の数詞について」『日本語の系統』岩波書店, p.101, 初出(1909)〉という懐疑的態度に変化した。

宮崎道三郎(1855-1928)の論文も史学雑誌に数回に渡って掲載された雄編で、日本語41語について、日本、朝鮮、中国の古典を引用しながら朝鮮語と比較、考証している。ただし、アストンや白鳥のように、音韻対応を導き出すことや、文法の比較はなされていない。

宮崎は東京大学法学部を卒業した後ドイツに留学し、帰国後は帝国大学法科大学教授として日本法制史、比較法制史を担当した。「近代的な日本法制史学の鼻祖」と称される。後に日本大学の創立者総代となる。その宮崎がなぜ朝鮮語の研究に踏み込んだのか。『宮崎先生法制史論集』には34の論文が収録されているが、そのほとんどは朝鮮語関係の論文である。このことについて、宮崎の高弟で後継者の中田薫¹⁴が述べている、

「有名なる言語学者ヤコブ、グリムが言語のみを材料として独逸の古代法制を記述した「独逸法律考古学」は、独逸法制史の研究方法に、一転換を与へた不朽の名著であるが、先生も亦之に倣つて、比較言語学の力を藉りて以て、我古代法制史料の欠陥を補はんと試みられたのである。其最初に手を着けられたのは、日韓両語の比較であつて、明治三十六年八月には之に関する材料を蒐集するがために、官命を以て韓国に赴かれたこともある。其後比較の範囲は満洲語、蒙古語までに及ぶに至つたが、着々其成績の挙がるに従ひ、益々多くの興味を持たれ、遂に晩年まで此方面の研究に没頭して居られた」〈『宮崎先生法制史論集』序言, p.4〉。

以上のような日本語と朝鮮語との比較の行き着いたところが(1915)『日本外来語辞典』三省堂書店、であろうか。同書は上田万年、高楠順次郎、白鳥庫吉、村上直次郎、金沢庄三郎の共編で、序文

¹⁴ 中田薫(1877-1967)も朝鮮語の研究に手をつけ特に朝鮮古代の郡村の語源に関する論文は、史学雑誌上で白鳥庫吉と論戦を重ねた。中田薫(1943)『法制史論集』第三巻下, 岩波書店, に収録。晩年には(1956)『古代日韓交渉史断片考』創文社, を刊行した。中田の弟子の石井良助によると「先生の御言葉によれば、これは宮崎先生に「カブレ」たものだそうではありますが、多くの力作を物されています」〈(1964)「中田先生の業績について」『法制史論集』第四巻, 岩波書店, p.320〉。

に協力者として小倉進平、金田一京助、前田太郎の言語学科卒業生の名前が挙げられている。

この辞典はバリカン、トマトなどの外来語はもちろん収録されているが、特徴的なのは朝鮮語との同源語を認定し、見出しとしている点にある。例えば、Agi (小児) の項目では、agi は小児という古語であり、朝鮮語 aka はこの古語を今日まで伝えているものだ、という注釈が金沢庄三郎の署名入りでなされている。注釈者として宮崎道三郎、中田薫、白鳥庫吉の名前もみえる。

金沢庄三郎は東京外国語学校韓語学科 (後に朝鮮語学科に改称) で教え、東京帝国大学講師として言語学科で日本語朝鮮語比較文法を講じていた。しかし明治43年 (1910) の日韓併合以後、朝鮮語学科廃止の方向へ進み、それに反対した金沢は大正6年 (1917)、東京外語を辞職する¹⁵。同じ年に東京帝大も辞した。

「大正六年二月、願いに依って東大講師を退かれ、同じ月従四位の叙位があった。先生、この時満四十五歳。以来、大正九年一二月に教科書調査委員を囑託されたほかは、一切官辺に近づくことをなさらなかった。詳しいその間の事情を詮索することはご遠慮したが、心境を屈原の漁父の辞に托して、書齋を「濯足庵」と号し、最後のお宅の玄関にも、半島出身の某書家揮毫の扁額が掲げてあった」〈渡辺三男 (1968) pp. 7 - 8〉。

「金沢博士の朝鮮語に関する講義が大正6年からなくなり、大正12年度から本田存先生の「朝鮮語」が始まる。(中略) 本田先生を東大の講師にお頼みになったのは、もちろん藤岡先生に違いないが、日本語と朝鮮語との親族関係は未証明なのにそれに関して独断的な意見を学生に押しつけられるのは困る、とのお考えに基づくものだと言ったことがある」〈服部四郎 (1984) 『言語学ことはじめ』私家版, p.65〉。

東京外語では朝鮮語科廃止勢力との対立、東京帝大では言語学科主任の藤岡勝二との軋轢があり、金沢は一切の官職を辞めた後、國學院大學を中心として、駒澤大学、鶴見女子大学で教鞭を執った。

金沢の他の著書では、西洋の言語学書の翻訳を大学院生時代より出しており、
ダルメステッテル著金沢庄三郎訳 (1897) 『ことばのいのち』 富山房、(1898) 訂正再版
セース著上田万年、金沢庄三郎訳 (1898) 『言語学』 金港堂
マクス・ミュラー著金沢庄三郎、後藤朝太郎訳 (1906, 1907) 『言語学』 2冊、博文館

朝鮮語関係では、『日韓両国語同系論』と同じ年に出版されたものとして、(1910) 『国語の研究』 同文館、がある。この本の題名は国語の研究だが、中身は34の論文からなり、そのほとんどは日本語を朝鮮語と比較して考証したり、アイヌ語、琉球方言などに言及したり、総じて『同系論』を補足するものと位置づけられる。

代表的な著書といえ (1929) 『日鮮同祖論』 刀江書院で、自説の日本語朝鮮語同系論をさらに推し進めて、両民族の同系を論じた。金沢自身の意図が那邊にあったかは不明だが、政治的にも社会的にも利用されることになる。もちろん同祖論の立脚点である両言語の同系が、誰しものが納得するように言語学的に証明されているわけではないので、学問的には同祖論も未証明、未成立である¹⁶。

¹⁵ 石川遼子 (1997) 「「地と民と語」との相剋 - 金沢庄三郎と東京外国語大学朝鮮語学科」朝鮮史研究会論文集35;

¹⁶ 三ツ井崇 (1999) 「日本語朝鮮語同系論の政治性をめぐる諸様相 - 金沢庄三郎の言語思想と朝鮮支配イデオロギーとの連動性に関する一考察 -」朝鮮史研究会論集37。

第二次大戦後も金沢の研究意欲は衰えず、1947年から垂細亜研究叢書全20冊、創文社、として『文と字』『猫と鼠』『崑崙の玉』『茶』『垂細亜研究に関する文献』『地名の研究』が相次いで出版されたが、そのまま中断してしまった。予定書名の中には日鮮満蒙比較言語学、新羅の片仮名、吏道の研究など興味深いものがあっただけに残念なところだ。このシリーズはB6判の薄い冊子ではあるが、中身は金沢の学殖を縦横無尽に発揮した論文から成り、博識ぶりがよく窺える。地名関係の論攷は(1994)『日韓古地名の研究』草風館、に収録されている。

金沢の還暦を記念して昭和7年(1932)に『東洋語学の研究』三省堂、が出版され、知友・後輩が日本語を含めた東洋諸言語に関する24の論文を寄稿した。翌年には、東洋語学に関わる金沢の蔵書中から還暦に因んで61の良書を選び、写真と解説を取めた『濯足庵蔵書六十一種』が私家版で刊行された。

金沢庄三郎は最晩年、麻布の永平寺東京別院の一隅に住み、1958年紫綬褒章を、1964年には勲三等瑞宝章を受け、1967年6月2日、95歳で大往生を遂げた。

参考文献

- (1986)『東京大学百年史』部局史1, 東京大学出版会
(1986)『東京大学百年史』資料3, 東京大学出版会
『帝国大学一覽』帝国大学, 1886年から毎年出版, 1898年以後は『東京帝国大学一覽』
(2000)『東京外国語大学史』東京外国語大学出版会
仁多見巖(1963)『アイヌの父 ジョン・バチェラー』楡書房
馬淵東一(1948)「故小川先生とインドネシア語研究」民族学研究13-2
渡辺三男(1968)「金沢庄三郎博士の人と学問」鶴見女子大学紀要5
松田義章(2002)「神保小虎の明治期における北海道の地質調査とアイヌ語山名」高澤光雄編『北の山の夜明け』日本山書の会

* 引用に際し、旧字体は新字体に改め、適宜改段を施した。

(さとう よしゆき 総合教育センター)